

パリだより：ユネスコ日本大使からの手紙（第12号）

『平和の庭』の修繕、アズレー事務局長の日本訪問

2025年10月22日

ユネスコ日本大使の加納です。

9月に入ってからパリは朝晩はかなり涼しくなり、10月になると肌寒い日も増えてきました。日もどんどん短くなり、秋の訪れ、そして冬も間近に迫っているのを感じています。9月、10月はユネスコでは各種行事が目白押しで、その対応に追われたため、パリだよりもご無沙汰となってしまいました。

今回と次回、2回に分けて、秋の主なユネスコ関連の出来事をご紹介します。

（ユネスコ本部「平和の庭（Garden of Peace）」の修繕）

ユネスコ本部の一角に「平和の庭（Garden of Peace）」と呼ばれる日本風庭園があります。現在のユネスコ本部庁舎が竣工した1958年にこの庭園も完成していますが、設計は日系アメリカ人のイサム・ノグチ氏によるものです。ユネスコ本部では様々な国際会議が日々行われますが、この庭園は参加者の憩いの場になっています。2019年には、本年8月に逝去されたユネスコ親善大使の千玄室宗匠（裏千家15代家元千宗室宗匠）がここで献茶式を行っています。



ユネスコ本部の「平和の庭」

この「平和の庭」の修繕作業のため、９月半ばに国土交通省の事業として日本から造園の専門家を招聘し、フランスおよび米国の専門家とともに、約１週間に渡り樹木の剪定などの作業を行ってもらいました。初日には、アズレー事務局長も現場に顔を出し、日本の専門家の説明に聞き入っていました。作業終了日の９月１２日にユネスコ事務局と日本政府代表部によるセレモニーを行い、各国代表団関係者とともに見違えるように美しくなった庭園を散策しました。



「平和の庭」修繕作業を視察するアズレー事務局長

この「平和の庭」誕生の経緯については、松木裕美氏の著書「イサム・ノグチの空間芸術—危機の時代のデザイン」に詳しく紹介されています。同書はユネスコ・アーカイブに残されている多くの資料を元にした労作ですが、そこから浮かび上がってくるのは、米国主導による第二次世界大戦後の多国間主義（マルチラテリズム）の再生の取り組みに、フランスなど欧州各国、そして日本が関わっていくプロセスです。当時のユネスコ事務局長は、アメリカ出身のルーサー・エバンス氏、ユネスコ本部庁舎の建築関係の責任者はハンガリー系アメリカ人建築家のマルセル・ブロイヤー氏、文化関係の責任者はルーブル博物館館長も務めたフランス人美術史家のジョルジュ・サール氏でした。多国間主義を象徴するユネスコ本部庁舎には古典的、西洋風ではないモダンでインターナショナルなデザインが選択されました。その一角に日本風庭園を造ることが決定されたのも東西文明の架け橋的な意味があったと言えるでしょう。

この庭園自体、伝統的日本人庭園を超えた普遍性、国際性が追求されており、造園家でない彫刻家のイサム・ノグチ氏に設計が委嘱されたのはその表れといえます。日本人の父、アメリカ人の母を持つイサム・ノグチ氏は米国を拠点にした彫刻家ですが、若い頃はパリでルーマニア人彫刻家コンスタンティン・ブランクーシ氏に師事し、また欧州、中南米、アジアを訪れ、各地の文化を自らの作品に取り入れるなど、その人生は非常にコスモポリタンなものでした。日本にも足跡を残しており、岐阜の美濃提灯とのコラボレーションに

よる照明デザイン「AKARI」シリーズはその一例です。ただ、日米両国にまたがるその出自故に、戦時中に日系人収容所に自発的に入った際の米当局者や日系人コミュニティとの間で隔絶が生じたり、戦後の広島平和記念公園でのモニュメント設計の提案が不採用になるなど、日米いずれの国にも完全には受け入れられなかった面もありました。

ユネスコ本部での「平和の庭」設計では、ノグチ氏は佐野藤右衛門氏をはじめとする日本の造園家と緊密に協力し、多くの石材が日本で選定され、ユネスコ本部に運び込まれました。日本政府もまた、加盟まもないユネスコでの「平和の庭」事業に日本が関与することの意義を見出し、財政面で後押ししました。

ユネスコ本部庁舎と「平和の庭」を巡る歴史に触れてから、改めて建物の中や庭園を歩き回ると、多国間主義の再生に込めた多くの人たちの思いが感じられる気がします。12日のレセプションでのスピーチにおいて、私からは、これら我々の共有財産の保存の重要性を強調しました。その後の庭園の散策では、ノグチ氏が師事したブランクーシ氏の母国ルーマニアの大使で現在ユネスコ総会議長を務める、ユネスコ・アーカイブの保存にも尽力したミクレスク(Simona-Mirela Miculescu)大使、また米国脱退決定を受けて、間もなくパリを去る米国のメインズ(Jean Manes)臨時代理大使と一緒にしました。

率直に言って、多国間主義をめぐる現在の国際環境は厳しいものと言わざるを得ませんが、それを支えていくことの重要性を再確認した1日でした。



9月12日の「平和の庭」修繕事業記念セレモニー

(アズレー事務局長の日本訪問)

「平和の庭」修繕事業記念セレモニーの翌週には、アズレー事務局長の日本訪問がありました。前回の訪日は2019年の第7回アフリカ開発会議の時です。本年11月のユネスコ総会での新事務局長の任命を受けて8年の任期を間もなく終えるので、今回が在任中の最後の訪日となります。

アズレー事務局長は9月18日の早朝にパリからの夜行便で東京に到着。同日の午後からあべ俊子文部科学大臣との会談、岩屋毅外務大臣との会談、石破茂総理大臣への表敬を行い、翌19日朝には次の訪問先の中国に出発するという、慌ただしい日程でした。一方、会談の合間を縫って、裏千家の東京道場を訪れて茶の湯を体験するなど、日本文化に触れてもらう機会もありました。私は一連の日程の全てに同行しました。



アズレー事務局長の石破総理大臣表敬



アズレー事務局長と岩屋外務大臣およびあべ文部科学大臣との会談

今回の訪問の背景には、任期を終えるにあたり、ユネスコに対する日本の支援への感謝の意を直接日本側関係者に伝えたいとのアズレー事務局長の強い思いがありましたので、事務局長も今回の訪問に大変満足していました。

アズレー事務局長の任期中には、コロナ禍や、ロシアによるウクライナ侵略、ガザをはじめとする中東での紛争、そして米国のユネスコ復帰、再度の脱退という、ユネスコの活

動に大きな影響を及ぼす出来事が次々とありました。その中で、日本がユネスコを支えてきたのは、アズレー事務局長の指導力の下、ユネスコが紛争地域での活動や、教育、防災、AI、文化など各分野で具体的成果をあげてきたことにもよりますが、根底には、日本がユネスコを戦後最初に加盟した国際機関として重視し、ユネスコ憲章が掲げる理念に共感して、その活動を一貫して支持してきたことがあります。

次の事務局長にもアズレー事務局長の実績を引き継ぎ、またユネスコが直面する課題に果敢に取り組んでいてもらいたいと思います。

（モンディアクルト：文化政策と持続可能な開発に関する世界会議）

９月２８日から１０月１日にかけては、スペインのバルセロナで「文化政策と持続可能な開発に関する世界会議（モンディアクルト）」が開催されました。前回２０２２年のメキシコでの会議に続くもので、アズレー事務局長およびオットーネ事務局長補（文化担当）の下では最後になります。アズレー事務局長はフランス、オットーネ事務局長補はチリのそれぞれ文化大臣だったこともあり、この国際会議は二人が最も重視していた行事の一つでした。また主催国スペインのユネスコ大使も前職がスペインの文化大臣、かつバルセロナのあるカタルーニャ出身ということもあり、彼にとっても最重要の行事でした。



文化政策と持続可能な開発に関する世界会議（モンディアクルト）開会式

このモンディアクルトの意義、狙いを一言で言えば、文化に国際公共財としての意義を認め、現在の持続可能な開発目標（SDG）の期間が終わる２０３０年のその次の開発目標の中に文化を一つの柱として位置付けるということにあります。

文化というと、衣食住に困らない人たちが楽しむ贅沢品というイメージがあり、衣食住を満たすための開発とはしっくり結びつかない感覚を持つ方もおられるかも知れません。しかしながら、ユネスコにおける文化をめぐる議論において、各国代表が注ぐ情熱、エネ

ルギーを目の当たりにすると、有形、無形を問わず、それが贅沢品ではなく、それぞれの国のアイデンティティ、尊厳に直結していることを痛感します。それだけに議論が白熱しがちな面もありますが、そのエネルギーを国の発展のために活かす可能性も見出すことができるように思います。

私自身は日程の関係上、前日のスペイン主催の夕食会と初日のみの参加でしたが、一連の行事の開始前にアントニ・ガウディ設計のサグラダ・ファミリア教会を見てきました。19世紀後半に建設が開始され、もうすぐ完成間近と言われているものの、いまだ工事中のユネスコ世界文化遺産ですが、その威容は建設に関わる人々の情熱、エネルギーを感じさせるには十分でした。



サグラダ・ファミリア教会

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

次回のパリだよりをお楽しみに。

ユネスコ日本政府代表部大使

加納雄大